

## 1 6 . 有用林内植物栽培試験

### (1) - c ヤマユリ栽培試験 (個体生長調査試験)

佐藤晶春・桃澤邦夫

#### 〔目的〕

林内に生育する低木や草本のうち利用や経済的な面から有用な植物を選定し、その栽培方法等の技術を見いだすことによって、新たな林産物や資源としての活用を目指す。

前項「(2)ヤマユリ栽培試験 (栽培適地試験その2)」(以下、前項)で行った調査地における個体の生長状況を把握することにより、ヤマユリの実生栽培適地の初期条件を調査する。

#### 〔方法〕

前項で試験を行っている調査地について、1998年8月26日に、調査地内の植生調査を行い(表-1)、ヤマユリ個体の葉を展開している数、地面から個体の先端までの長さ、一番広い部分の葉の幅を測定した。前項は経年的な生存状況を把握する目的から、葉が一個体から数枚でていても展葉個体数を1個と数えたが、今回の調査では生長状況を把握する目的により、一個体から2枚の葉がでていた場合、2個と測定し、それぞれの長さや幅を測定した。

#### 〔結果〕

前項で報告したとおり、8月26日ではヤマユリ個体の減少が進んでおり、全ての調査地で展葉個体数は最大時の半分以下となった。調査地①⑧はすでに個体が見られなかった。

植生調査については、表-1のとおり、調査地②④⑤⑥⑧⑪⑬は草本層の植被率が90~100%と高い結果になった。これらの調査地はチヂミザサにより占有される傾向があった。逆に調査地①③⑦⑩は総合植被率が0~35%と低い値を示したが、これらは調査地①を除いて落葉広葉樹林であり、春以降、上木の影響により、急激に照度が低くなる調査地である。

図-1にヤマユリ個体の平均幅、平均長について示した。平均幅では調査地⑤⑬が1.9cmを越え、調査地⑫も1.77cmとなった。逆に、調査地③⑨④⑦は1.2cmを下回った。特に、調査地③⑨は0.7cm未満となった。平均長は調査地②⑫⑬が7cmを越え高い値を示し、中でも調査地⑬は9.33cmとなった。調査地③⑨⑦は5cmを下回った。調査地⑫⑬は長さも幅も共に大きい個体が多く、調査地⑫は展葉数も他の調査地よりかなり多い結果となった。調査地③⑨⑦は共に小さい個体が多く、調査地③⑨は展葉数も少ない結果となった。

各調査地のヤマユリ個体の幅と長さとの相関係数は0.40~0.78程度であり、0.7を越えたのは調査地⑪⑫のみであった。そこで、個体の生長量を比較するために、(幅×長)を算出し、それらの平均を図-2で比較した。平均(幅×長)の比較では、調査地⑤⑫⑬の値が高く、調査地③⑨はかなり低く、それに続いて調査地④⑦も低い結果となった。

表-1 調査地の1998/8/26の概況

調査地	草本層植被率(%)	優占種(被度%)	ヤマユリ展葉数
①(プランター)	0	なし	0
②(草地)	100	チヂミザサ(70%)他13種	5
③(落葉広葉樹林)	6	ヤマノイモ(3%)他17種	9
④(スギ人工林)	95	チヂミザサ(50%)他24種	24
⑤(スギ人工林)	95	カヤツリグサsp(25%)他28種	10
⑥(ヒノキ人工林)	100	チヂミザサ(75%)他22種	19
⑦(落葉広葉樹林)	35	コウヤボウキ(12%)他16種	21
⑧(スギ人工林)	90	チヂミザサ(20%)他18種	0
⑨(草地)	65	ススキ(55%)他13種	2
⑩(落葉広葉樹林)	35	オウレン・セリバオウレン(10%)他18種	26
⑪(ヒノキ人工林)	95	チヂミザサ(30%)他23種	23
⑫(スギ人工林)	80	チヂミザサ(25%)他21種	50
⑬(ヒノキ人工林)	100	チヂミザサ(95%)他16種	10

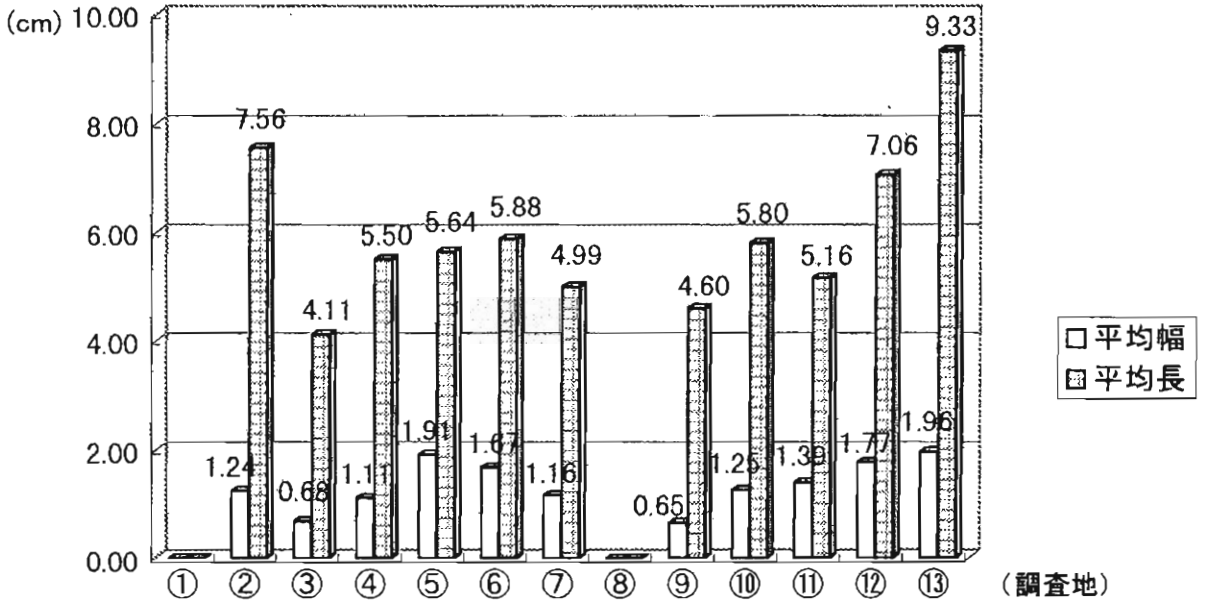


図-1 各調査地における平均幅・長の比較

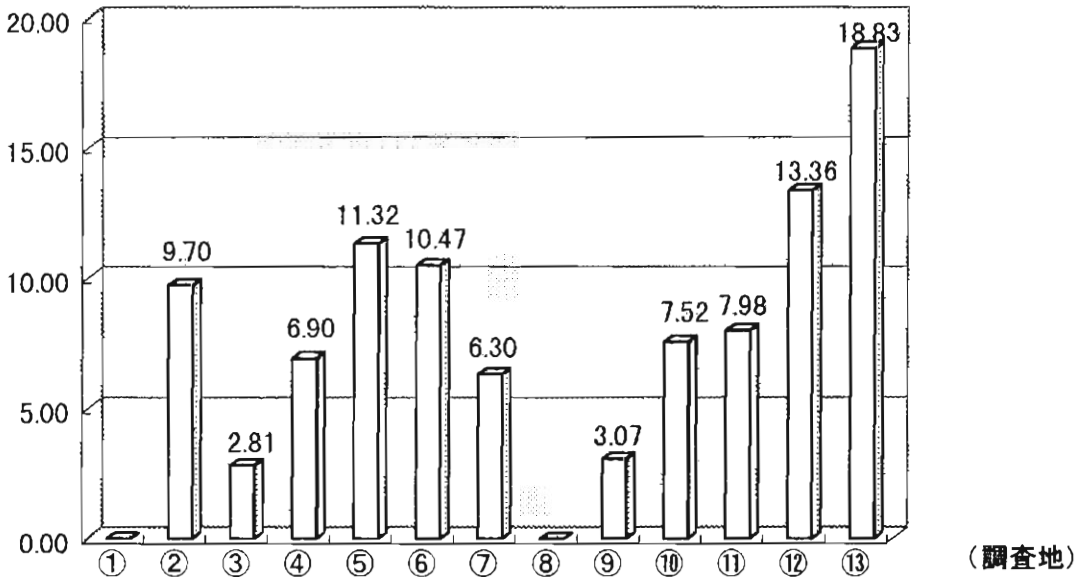


図-2 各調査地における平均(幅×長)の比較